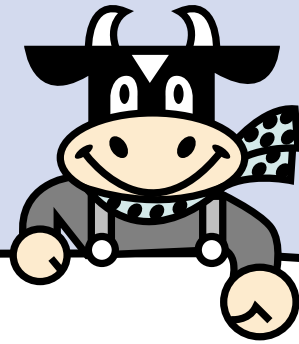




# ワンポイント・アドバイス



## 牛のお産介助の注意点

分娩が開始されたにもかかわらず、出産までに長時間を要し、胎児が娩出されないものは、異常分娩（難産）の可能性がります。一次破水後、約1時間経過しても四肢が出て来なかったり、陣痛が見られない場合は、手指と外陰部を消毒後、手を産道に挿入して胎児を観察します。この場合、必ず刺激性の少ない消毒液（無ければ石鹸）で手や腕と牛の外陰部をよく洗ってください。直腸検査用の手袋があれば、それを使用した方が良いでしょう。（牛の外陰部を洗う手袋と膣内に挿入する手袋は別の方が良いです）手を洗わないで挿入した場合は、皮膚表面の細菌を子宮内に入れることになり、産後の感染性子宮炎（産褥熱）の原因になることがあります。

### 《胎児の向きに注意》

胎児の前肢と後肢を間違えて牽引した結果、側頭位（胎児の頭が外側に向いた状態）が重度となり、娩出不能となる例を時々見受けられます。ここでは前肢と後肢の判別方法を紹介します。

### 前肢と後肢の判別方法

関節の曲がり方で見分ける  
前肢はコの字に曲がり、後肢はS字状（またはZ字状）に曲がります。（図1、2）

つまり、前肢であれば球節の1つ上の関節（手根関節）が球節と同じ曲がり方をし（図1）、後肢の場合は球節の1つ上の関節（飛節）が球節と逆の曲がり方をします（図2）

しっぽを触れば尾位  
尾位の場合、手をさらに奥に進めていけば、胎児の尾を触ることが出来ます。ちなみに、側頭位の場合も胎児の頭部を触ることが難しいので、頭部に触れないからといって尾位であるとは断定できません。



図1



図2

牽引してください。

中途半端な状態で牽引すると、側頭位（胎児の頭部が横に曲がった状態）となり、人工的に難産を作り上げてしまうことになります。（図3、4、5）

例えば、産道に手を入れた時点で既に図4の状態にあることがあります。手を奥に進めて確認すれば頭位であることはすぐにわかりますが、この状態から正常の分娩させるためには、介助により胎児の頭部を産道に誘導する必要があります。

### 《胎児を牽引する場合の注意》

胎児を牽引する場合、次のことに注意してください。

・頭から来ている場合（頭位）  
胎児の頭部が途中から曲がらないように

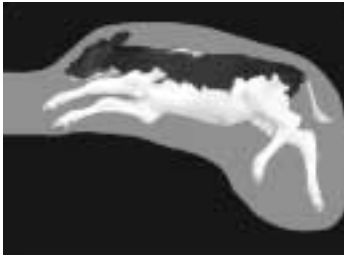


図3



図4



図5

### 《産道の広がり方に注意》

産道がなんとなく狭く奥の方で急に落ち込んでいるような場合は、子宮捻転の可能性がります。通常はそのままでは娩出できませんので、往診を依頼してください。

よく注意して膣壁を触ると、捻転により発生した皺が確認できる場合があります。ただし、重度の場合は手を産道奥に挿入することさえできません。

### 《早期人工破水の弊害》

産道は胎児と羊水を含む胎胞により時間をかけて広がるので、胎位胎向（胎児の向きなど）が正常で陣痛が正常にきている場合は、自然分娩をさせることが原則です。

出かけるから、あるいは眠いからといった理由で、人工的に破水させてしまう

### 《その他》

産道は十分開口しており、胎児の向きなどに異常がないのに、陣痛が弱くなかなか分娩しない場合は陣痛微弱による難産の可能性がります。原因としては乳熱（低Ca）やオキシトシンの分泌不足などが考えられますので、往診を依頼してください。



図6



図7

これを怠り、そのまま牽引すると図5のような難産（側頭位）を引き起こすことになり得ます。  
胎児の頭部をつまみ産道に誘導できても、牽引途中に曲がることがあるので、完全に産道に乗るまでは時々胎児の頭部を確認することが必要です。（特に胎児が死亡している場合）  
・後肢から来ている場合（逆子、尾位）  
尾位の場合、胎児の頭部がまだ産道に残っている位置で臍帯（臍の緒）が切れます。  
胎児は臍帯が切れると同時に呼吸を開始するので、この時羊水を誤嚥してしまう恐れがります。従って、頭位の場合より早めに娩出させることが大事です。特に、腰角（こしぼね）が見えてきたら速やかに牽引する必要があります。（図6・7）